

# 遍照山 第39号

平成25年7月 7日発行

## きびしい暑さに耐えて！

気持ちいい汗をかこう

今年の梅雨は、例年より十日も早く入ったのに、もう夏の様子を伺える毎日が続きます。本当に大変です。農業を携わっている方に聞けば、水不足が心配しておられる声を聞きます。

日本がワールドカップに一番乗りを果たす快挙で湧き上がった、安倍総理が、国民の年間所得を増やすと景気の良い話題を提供して、心躍る場面があって、世情が明るくなってきています。

しかしながら、外観ばかりが良くて、中身が問題です。心が育たない社会はどうでしょう。本来は、心が満たされて幸せを感じるものです。景気ばかりが良くて、心が貧しければ喜びが感じられません。いじめや犯罪という悪ががはびるばかりで、いい世の中とはいえないのが残念です。

人間、前向きに行くには後悔しないことです。悪を断じて断ち、善根功徳を積み重ねていくことが大切です。それを実践するのは、私たちです。

私たちの暮らしは、安らかに暮らすことです。安らかに暮らすには、足ることを知る。すなわち仏教では、「少欲知足」「吾れ唯足ることを知る」です。お「り高ぶる心でいれば、必ず苦しみます。世界をさまよふことになり、寿命も短くなりま

す。人は、長く生きたいものです。一度、お寺の本堂でおしゃべりしませんか。きつとひとすじの光明がさし、すがすがしい境地いたることができると思います。

## お施餓鬼(施食会)の始まり

お施餓鬼の由来は、「仏説救会救抜炎口餓鬼陀羅尼經」というお経に次のように説かれていま

す。お釈迦様の十大弟子の一人に、お釈迦さまの法話を一番多く聞いたところから、多門第一といわれた阿難さまという方がおられました。

阿難さまが、ある夜、森の中で静かに瞑想を(座禅)しておりましたと、突然、やせ衰えて、喉は細く、口から火を吐き、髪は乱れ、目は奥で光る醜い形相の焰口という餓鬼があらわれて、「お前はあと三日のうちに死ぬ。そして私のような醜い餓鬼に生まれ変わるであろう。」といひます。

驚いた阿難さまが、どうしたらその苦難を逃れられるかと餓鬼に問いました。

餓鬼は、「われわれ餓鬼道にいる苦の衆生、あらゆる困苦の衆生に対して、飲食を施し、仏、法の三宝を供養すれば、お前の寿命は延び、我々もまた苦難を逃れることができるだろう。」と阿難さまにせまったのです。

阿難さまは、驚き、怖くなって、お釈迦さまのもとへ行き、どうしたらよいのかとお尋ねしました。

お釈迦さまは、「施餓鬼棚に新鮮な山海の飲食をお供えし、修行僧に施餓鬼の法要を営んでもらいなさい。修行僧のお経の功徳によって、少量の供物は、無量の供物となり、すべての餓鬼に施されます。そして、多くの餓鬼が救われ、おまえも長生きするであろう。さらに尊いお経の功徳によってさとりを開くことができるであろう。」と説き下さいました。

早速、阿難さまは、お釈迦さまの説かれたとおり、施餓鬼棚を設け、山海の飲食をお供えし、供養を営みますと、生命は助かり、さとりを開くことができました

さらにお釈迦さまのお弟子の中で最も長生きをされたそうでありま



ります。

「二二」という餓鬼という言葉は

長い間侮蔑的に使用されてきたこととありますが、本来、仏教的意味は差別を助長する言葉でありません。これが、中国では、水陸の鬼衆に供え、供養することから「水陸会」といわれるようになり、日本では平安時代の中ごろに伝えられ、鎌倉時代以降、地獄思想が普及するにつれ、次第に広く一般に営まれるようになりました。

私達は毎日、何気なく口にいれているお米や野菜、魚肉などの生命を奪って生かされています。これらの生命の犠牲の上になりたっているといっても過言ではないでしょう。自分自身が長生きできるように願うばかりでなく、すべての生命を尊びなさいという教えが、お施餓鬼(施食会)なのです。

お精霊さんを迎えましょう

しょうらい

## お精霊さんを迎えましょう

### ○墓参り

八月七日〜十二日 午前五時〜十時ころ

※最近では、土、日曜日に墓参りをなされる方が多くなりました。大変有難いです。

八月十三日 午前五時半〜 佐賀、

午前六時半〜 上寺

たなきょう

### ○棚経

八月十三日 午後 十四時〜二十時

十四日 午前 四時〜二十時

### ○盆施餓鬼会 八月十五日午後一時半

(盆の挨拶受けは、午前六時より十時ころ)

### ○御詠歌で送る 十六日 早朝

## 初盆をお迎えされる方へ

今年、新しい先祖を迎えられた家族様には、ご案内いたします。来る八月十五日午後一時半に玉泉寺本堂おきまして、盆施餓鬼会を開催し

ます。

この法要は、亡くなったご先祖様の追善供養をして、遺された家族の平安を祈るものがございます。特に、一年を満たない家族様にとって、寂しいお盆をお迎えされますので、この施餓鬼会に御戒名を呼ばせていただき、ひとときを過ごしていただくために案内しています。大変暑いときで恐縮ですが、お参りください。



回向料としては三千元ですので合わせてお願いします。

「びんずる会」7月に結成しました。この会は、足つ座、知つ楽、しん身、を仕、楽し生活。心身健康入詳。奉、写経をします。住職。禅、写経をします。住職。み、健康入詳。一、写経をします。住職。目を指します。住職。会、健康入詳。く、写経をします。住職。で、健康入詳。さい。

## おかえりなさい

「亡くなった人はどこへ行くのだろうか」多くの人は一度はそう思ったことがあるのではないのでしょうか。仏教では亡くなった人は仏様の世界へ往くといひます。そこにはもう生きている私たちの手が届かない遥か遠い彼方の世界のように思ふかも知れません。

けれども日本人は、お盆になれば、亡くなった人が帰ってきてくれると信じています。

生と死、この世とあの世、亡くなった人と残された私たち。決して触れ合うことの無いことのないと思われ。

この二つの姿が穏やかにそして温もりをもって交わっている。そこには懐かしいあの人が帰ってきてほしい。心を通わしたいという切なる願いがこめられています

※今回に限り、裏面に、供養塔の建立の発願文を載せていますので、ぜひお読みください。

発行者 高島市安曇川町田中三四五九

天台眞盛宗玉泉寺 木村 哲基

電話 〇九〇—三七〇八一七二〇六

Eメール svka37375@leto.eonet.ne.jp